相模経済新聞　2018年5月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ

北里環境科学センター
理事長／宇宙生命哲学者
伊藤 俊洋

2

生命について

宇宙空間から漆黒の闇に浮かぶ青い惑星を眺めながら、その星の上に展開される生命現象について宇宙生命哲学的に深く考えてみよう。

地球上の生命現象は、化石や放射性同位元素の測定から、およそ38億年前に始まったと考えられている。地球上の最初の生命が、地球上で誕生したのか、地球外から飛来したのか、現時点ではわかっていない。生物は地球環境の変化にも対応しながら、進化を重ねて、現在の生命世界に辿り着いた。現在の地球上では、先ず植物が葉緑体で太陽エネルギーを使って炭酸ガスと水から糖を合成し（光合成）、それをもとにたんぱく質、核酸、脂質などを合成して、生命の循環の基礎を築いている。植物が作り出したこれらの物質は動物の栄養素となり、食物連鎖を介し豊かな栄養源が自然界に満ち溢れてゆく。人類は、進化の過程で耕作や牧畜の技術を生み出し、新しい文明を構築した。この人類の文明社会を含めた生命世界は、基本的に地球環境から生まれてきて地球環境に戻る循環の世界である。地球上の生命世界は、人類を始めとして全ての動物、植物、微生物、さらには大気、大地、大洋を含め、時空を超えた4次元環境生命体と考えられる（図）。その生命体が、38億年という長い年月を生き抜いて、今、我々の目の前に青い惑星となって浮かんでいる。

図　地球上で、時空を超えて循環する四次元環境生命体

我々人間は、これからも、地球が温暖な環境に保たれる限り地球上の生命現象の一部として循環して行く。この循環は、地球上という限られた閉鎖環境の中で、不滅の原子が織りなす組み替え現象として成立している。

最近話題になっている火星移住計画が、いかに無謀なことかは容易に理解できるだろう。火星には生物が循環できる環境はない。その環境を作り出すには、まず地球上と同等の大気、肥沃な大地、豊かな大洋、そして溢れる太陽エネルギーが必要である。そこに微生物、植物を繁栄させ、温暖な環境を作り出し、その後に人類は移住することになる。そのためには、おそらく何億年もの年月が必要だろう。火星移住計画は、地球の素晴らしさを学ぶための教育プロジェクト以外の何物でもない。宇宙に行った人たちは、口を揃えて地球の素晴らしさを語っている。人類は豊かな知性を備えているのだから、もうそろそろ宇宙に行かなくてもそのことに気づくべきではないのか。